かわらけ土坑

大型井戸南正面には、玉砂利排水路の一部を壊して掘られた穴、「かわらけ土坑」がありました。かわらけとよばれる赤い小皿や須恵器などが大量に棄てられており、儀礼に使った皿をまとめて埋めるために掘られた可能性があります。

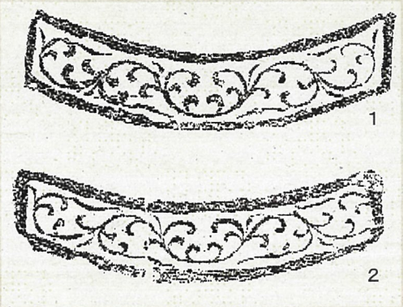
かわらけ土坑は、平安時代に京の都から伝わった儀礼の痕跡で、「式三献」のルーツです。

神戸市内では清盛の造った福原京とされる兵庫区祇園遺跡に最も古い発見例があり、天皇につき従った都の貴族たちが神戸にもたらした可能性があります。

かわらけ以外に井戸屋形の屋根に葺かれていたと思われる軒平瓦も一緒に出土しています。「C字唐草紋」と呼ばれる紋様で、清盛と関係があるとされる瓦の仲間です。

瓦の製作年代である12世紀中葉～後葉は、まさに清盛が東播磨を併呑しようと画策、東大寺と争っていた時期です。垂水荘の瓦が平氏政権とのかかわりの中でもたらされたとすると、東大寺文書には書かれていない平氏と垂水との関係を物語る証拠かもしれず、とても貴重な発見です。

C字唐草紋軒平瓦出土状況



鳥羽離宮で使われたC字唐草紋瓦

祇園遺跡出土のC字唐草紋瓦

今回の垂水日向遺跡での発見は、最も古い大型建物が使われた11世紀に、垂水で中世的な在地領主が登場した事を意味しています。彼らは鎌倉時代に武士へと発展していく階層の人々と考えられます。

平氏とのつながりを示すかわらけ土坑は、三方を平氏領に囲まれ平氏の勢力が日本中を席捲する時代情勢の中で、平氏と手く付き合いながら、自分たちの立場を守ろうとした彼らの努力の痕かもしれません。

垂水を治めた代々の在地領主は、上級支配者が東大寺であろうと平氏であろうと国衙であろうと変わることなく、その土地に代々根ざし、時々に移り変わる権力者と上手く交わりながら、歴史の荒波を乗り越えていったようです。

（1-2　明石市 2017『林崎三本松瓦窯群　発掘調査報告書』より転載）
（3　上原眞人 2014「古代の終焉と播磨の瓦生産」『明石の古代Ⅱ』明石市より転載）

垂水日向遺跡の発掘調査―中世東大寺領垂水荘の調査と成果―

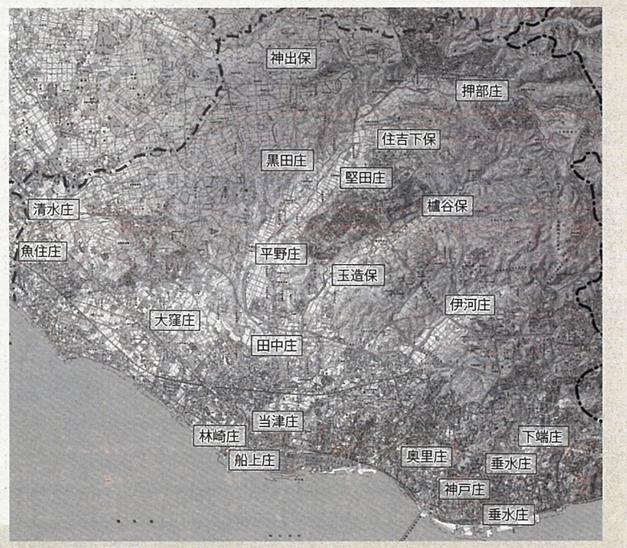
垂水日向遺跡について

垂水日向遺跡は、縄文時代に始まる遺跡です。明石海峡に近く、いにしえより奈良や京都、大阪といった中枢地と西国を結ぶ海路の重要拠点でした。

８世紀に東大寺の荘園となり、「垂水荘」と呼ばれるようになったと東大寺に残る古文書には書かれています。

『東大寺文書』に書かれた「垂水荘」

『東大寺文書』には８世紀から垂水は東大寺の荘園だったと書かれていますが、10世紀の『和名類聚抄』という辞書には、『垂水郷』と書かれています。「郷」は「●●町」くらいの意味で、公有地と考えられます。



中世明石郡の荘園　（石島三和 2015年「明石の中世荘園」『明石の中世』明石市より転載）

「垂水荘」の位置と範囲

『東大寺文書』には、垂水荘の範囲について**「東寒川　南南海辺道　西垂氷川　北太山　堺地三百六十一町。」**と書かれています。「垂氷川」が福田川、南は海岸沿いの道です。寒川と太山についてはよくわかりません。

平清盛

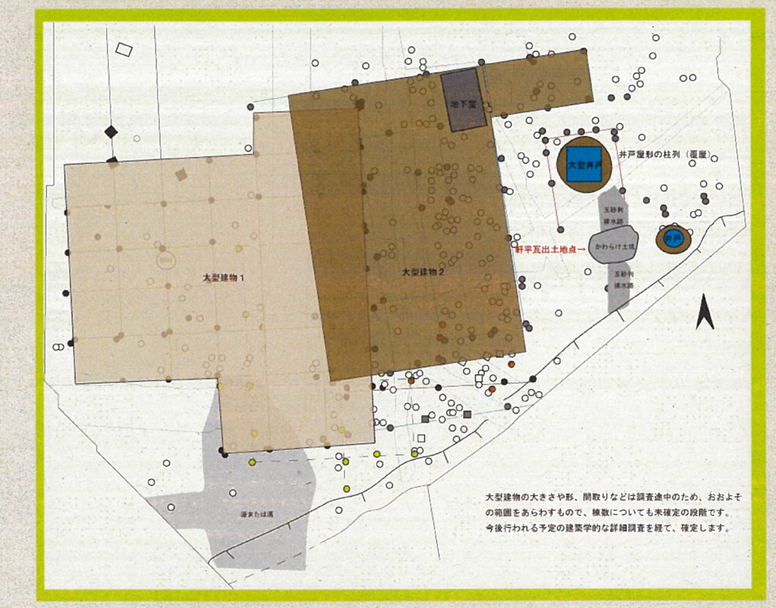
清盛の野望と垂水を巡る争い

平安時代に平氏が政治の実権を握るようになった頃の古文書には前太政大臣藤原実行と寺の間で、垂水荘の支配権を争う裁判が繰り広げられた記録が残っています。実はこの軋轢（あつれき）の背景には、平清盛がいたようです。清盛には、西国に繋がる播磨一体を支配する野望があったようです。

垂水荘、公有地に戻る

清盛時代の垂水荘は西、北、東と三方を平氏領に囲まれ、平氏の影響を受けていたようです。東大寺は小野市にある「大部荘」と垂水を交換する条件で播磨に荘園を持つ権利を守りますが、結果的に垂水は清盛の狙い通り東大寺の支配を離れ公有地に戻ります。東大寺領としての「垂水荘」の歴史は、12世紀中頃に幕を閉じるのです。

古文書にはない垂水荘の実態



南調査区の大型建物址模式図

今回の発掘調査では、11 世紀末から 12 世紀中頃までの遺構や遺物が発見されています。

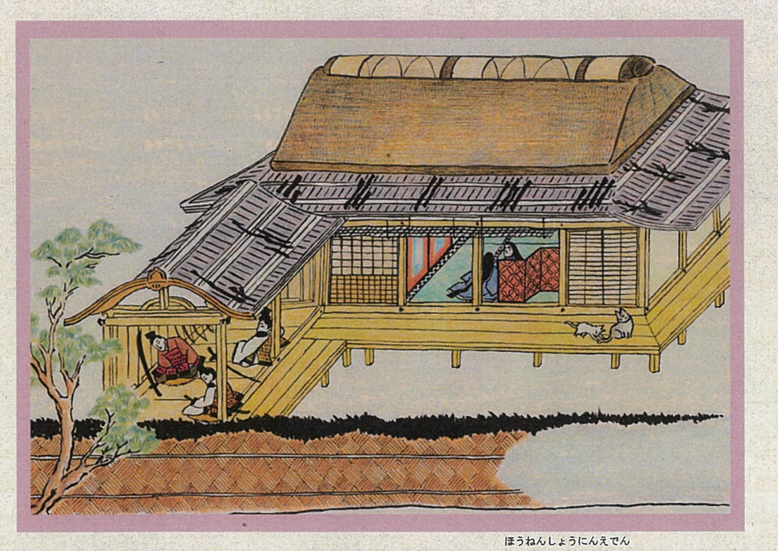
これは『東大寺文書』に書かれた「垂水荘」と一致するもので、三方を平氏領に囲まれていた時期です。

建物はすべて平安時代のものですが、細かな年代差があり、古いものをとりこわし、新しく建て直した様子が柱穴の残の残りかたから分かります。

調査中のため詳しい事はまだ分かりませんが、柱穴の配置から、建物は鎌倉時代の武家屋敷（ぶけやしき）の前身的な構造や間取りと推測されます。

今回の大型建物は、平安時代にこの地を治めた長者的な人物＝「在地領主（ざいちりょうしゅ）」の館と考えられます。

在地領主たちは、自分の私宅を荘園管理事務所にかねていました。



鎌倉時代の武家屋敷（『法然上人絵伝（ほうねんしょうにんえでん）』より復元作成）

大型建物の地下室（ちかむろ）（床下収納的な施設）

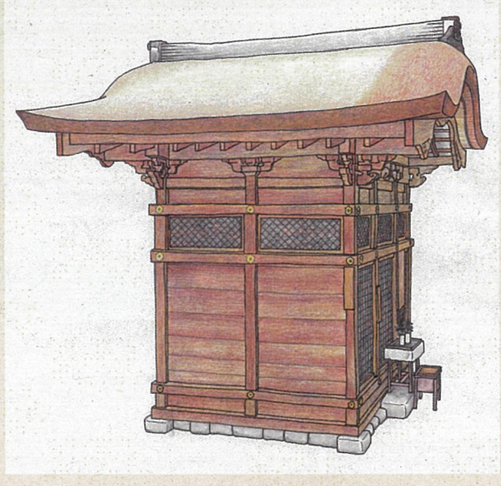
大型建物の柱

中型井戸（手前）かわらけ土坑（左上）大型の井戸（右上）

中型の井戸

南正面には玉砂利を敷きつめた排水路も設けられていました。井戸は古い方の建物と同時期と考えられますが、立派な造りで、すぐ近くにさほど時期差のない中型の井戸を伴うなどの特徴から、大型井戸は何か特別な用途があった可能性もあります。

大型建物横で発見された井戸は直径 2.5m ほどあります。井戸の上には「井戸屋形（いどやかた）」と呼ばれる覆屋（おおいや）が建っており、屋根は瓦葺（かわらぶ）きだったと思われます。



園城寺の井戸屋形（近世初頭：参考資料）